

令和 6 年 10 月定例記者会見

【 説 明 】

〔01_奈良先端大との共催で起業家精神を学ぶイベントを開催〕

市長 「いこま産学官アクセラレーションプログラム(I-SAP)」の立ち上げに際して、(株)メルカリ会長で(株)鹿島アントラーズ FC 社長の小泉文明さんにお越しいただいてイベントを開催します。

このプログラムは、生駒市で奈良先端科学技術大学院大学（以下、奈良先端大）の研究シーズをビジネスに変えてスタートアップを育成し、それをまちづくりに生かすとともに、生駒市、奈良県、そして関西を活性化していくような流れを作っていこうということで、今年度から新たに始める事業支援のためのプログラムです。奈良先端大には全国そして世界的に見ても素晴らしい研究シーズがあるということは、広く認められていますが、研究開発のシーズのビジネス化については、まだまだ課題があります。実際の研究力の高さをどうビジネス化していくのかというビジネスプラン作りや顧客開発、資金の調達、知的財産の保護の活用、企業法務等をどのようにするか等は 1 人の研究者の方だけではなかなか難しいので、それに伴走していくようなプログラムを生駒市の方でも用意して力を合わせて、ビジネス化やまちの活性化に繋げていきたいと思います。特に全国や海外からもスタートアップ企業の誘致というのは当然ありますが、それだけではなく、奈良先端大からスタートしていくようなスタートアップをしっかりと育てていきたいと考えています。学研高山地区第 2 工区（以下、学研第 2 工区）の開発はこれから大きく進んでいきますので、学研第 2 工区をスタートアップから魅力に感じてもらえるように、その大きな柱を担っていくプログラムにしたいと考えています。

スケジュールとしては、プログラムに参加をしていただく参加者を募集して、採択したものについて来年 3 月にかけて支援し、どういうビジネスをしていくのかという成果の発表をしていただき、実際にビジネス化に向けて動いていくということで、参加者や採択のテーマによってはもう少し時間をかけるものもあるかもしれませんが、一応今年度で完結するスケジュールとする考えです。

学研第 2 工区の開発も含めて、奈良先端大のレベルの高い研究をビジネス化できるところを、このプログラムと一緒に伴走して具体化していきたいということを、まずご理解いただければと思います。

その第一歩の具体的なイベントとして、11 月 29 日にメルカリ会長で鹿島アントラーズ FC 社長の小泉文明さんに奈良先端大にお越しいただき、イベントを開催します。小泉さんは大学卒業後、大手の証券会社に入られてその後、自ら独立してミクシィや DeNA 等の IPO を担当し、メルカリに参画して、社長に就任されるなどスタートアップの最前線で実績もありますし、鹿島スタジアムを中心に鹿島市のまちづくりについて、サッカーを通じて、市とも連携していろんな活動をしておられます。奈良先端大の先生方や学生に、研究されていることを社会のために活かしたり、起業したりということに関心を持っていただくイベントにしたいと思います。

当日は、小泉文明さんの基調講演の後、「若者が拓く生駒市の未来：教育と起業の融合」というテーマで、パネルディスカッションを行います。小泉さんと塩崎学長と私も登壇すると同時に奈良先端大で起業に向けて頑張っておられる学生も一緒に登壇していただきます。

また、アクセラレーションプログラムの採択を受けた3つの研究シーズについての概要の説明とブラッシュアップしていくという紹介も兼ねたいと思っています。

こういうプログラムは、都道府県や、福岡市、神戸市、浜松市などの大きな政令市では実施されていますが、生駒市の規模でどこまでできるかは大きな挑戦ですが、学研第2工区そしてまた日本で2つしかないこの先端科学技術大学院大学が生駒市にあるということのありがたさをより具体化するために今回挑戦をしたいと思います。

奈良先端科学技術大学院大学塩崎学長 本学は2021年に生駒市と包括連携協定を締結しまして、様々な取組で連携をしています。今年度から始まった「いこま産学官アクセラレーションプログラム」はとりわけ、本学の強みを活かして新たな形の地域貢献に繋がるというふうに変化を期待しています。

特に、本学の持つ研究力や技術力をいかに社会実装していくか、あるいは事業化に繋げていくかということは、国にとっても非常に重要な課題であり、政府も力を入れております。特に、科学技術に特化した研究大学である奈良先端大にとっても大きなチャンスでもありと考えております。起業家の人材育成ということについても、長らく取り組んでおりまして、2015年からグローバルアントレプレナー、あるいはイノベーション人材育成というプログラムで、文部科学省の方から支援をいただきまして、GEIOT（ガイオット）というプログラムも2015年にスタートして、違った科学技術分野に広げながら今年で10年継続してきたという実績と経験があります。

GEIOTでは、本学の学生はもちろん、他大学の大学院生や社会人の方にも履修していただける文部科学省認定の職業実践力育成プログラムという形で実施されており、先端的な科学技術、あるいは研究のシーズというものを製品やサービスの設計や実現に展開して、起業や事業創出をリードできるような人材の育成ということに努めてまいりました。

その結果として、実際にこのGEIOTの受講者の中からビジネス展開を目指して起業するという受講生のグループがこれまでいくつも誕生しているという実績もあります。それから本学には2018年に設立された、学生の自主的なサークル活動として起業部というのがあり、起業に興味のある学生たちが学年や専門分野を超えて活発に活動しています。もちろん学生だけではなく、これまで起業したあるいは現在起業を計画されている先生方も増えてきておりまして、今回メルカリの小泉会長を奈良先端大にお迎えして、講演に加えて本学の起業部の学生も交えたパネルディスカッションにも参加してもらうというイベントを開催することで、本学の学生や教職員はもとより、起業という活発化しつつあるこの潮流に興味のある生駒市民の方々にとっても、またとない機会になることを期待しています。

【 質疑応答 】

記者 このプログラムで奈良先端大に期待されることは何ですか。

市長 奈良先端大は、高い技術力や研究力をお持ちで、社会実装にも前向きに取り組んでいただいております。実際に地域共創というような形で専門の組織もあり、地域の課題にどう応用し、研究を生かしていくのかというようなことを具体的にに取り組んでいただいているということで期待しています。

また、学研第2工区は、立地的にも関西、日本のど真ん中ですし、大きく活性化していくことは日本を関西そしてもちろん生駒市にとって非常に大きなことだと思っています。奈良先端大の研究の大きな力をいかに社会実装していくか、また、事業化して持続可能な形でさらに大きな力にしていけるか

というのは非常に重要なことだと思いますので、前向きに連携して新しいことにチャレンジしたいと思っています。

記者 今回の支援事業と学研第2工区の開発とはタイムラグがあると思いますがどうですか。

市長 学研第2工区については最速でも令和9年度から具体的に動き出すということであと数年はかかると思います。

ただ既に奈良先端科学技術大学院大学支援財団ではインキュベーション的な事業もしていますし、起業を志す学生が実際に第一歩を踏み出すような場所は奈良先端大の中にもあります。生駒市でもILBHというプログラムで起業等を応援する仕組みもありますので、当面はそういうような場所を生かしていきながら、スタートアップも一定の時間がかかるということで、そういう生駒発のスタートアップをしっかり応援していくことで、学研第2工区にスタートアップの集積の地のような場所ができたときに、ここでどんどん成長してオフィスを構えたり、奈良先端大との連携ができたりする場所作りは速やかに整えていきたいと思っています。

記者 来年度以降も支援は継続しますか。

市長 今年度のプログラムの状況を見てからにはなりますが、こういう奈良先端大のシーズを社会実装化していくような応援は継続したいと考えています。市役所の体制の強化はもちろん、5か月の伴走期間についても必要があれば延長するなど、来年以降も改善改良を加えながら強化していきたいと思っています。

記者 スタートアップは今回3社採択ということですが、今後どれくらいの応募を期待していますか。また、今後、生駒市に拠点を置いて活動するのに必要なことや期待することは何ですか。

学長 本学自体大きな大学ではありませんが、大学全体が科学技術の研究に特化しているという意味では大学としてこの新たな研究のシーズというポテンシャルは次々と出てくると思います。特に、研究者だけではなくて、学生が在学中からスタートアップやビジネス化ということを考えるようになってきている中で、本学としては、常に最先端の研究をしていく中で、イノベーションエコシステムの中心に本学がなり、学研第2工区も含めて、かつてのスタンフォード大学を中心としたシリコンバレーのように、エコシステムとして地域が一つの発展の形というふうに繋がっていけばと考えています。

その中で、スタンフォードの例もそうですが、やはり大学に近接したところにスタートアップが拠点を構えるというのは、最先端の技術、人材等のコネクションという面で非常に大きなメリットがあります。本学では最近、公式に大学発スタートアップというのを認定するという制度を始めました。これは、最初スタートアップを始めたときに、まず、会社を登記する場所をどこにするかというところが最初の関門になります。そのときに、大学発スタートアップと認定した会社に関しては、本学の住所をスタートアップの住所として郵便の受け取り等も含めて支援するというような形です。また、大学と新たにできたスタートアップの繋がり、人材交流や大学と繋がりのある他の企業とのネットワークなどいろんな形で支援できる、また、大学が中心となったスタートアップの支援環境、育成環境というものを作っていけるという意味で、本学あるいは生駒市に拠点を置いたスタートアップが増えてくれることを期待しています。

〔02_創業セミナー卒業生たちが「学びのマルシェ」を開催〕

市長 IKOMA LOCAL BUSINESS HUB（イコマ ローカル ビジネス ハブ：ILBH）には、たくさんの方が参加をしていただき、学び、また行動を始めていただいています。具体的な事例として今回卒業され

た皆さんが「学びのマルシェ」という、「学ぶ」ということをテーマにしたマルシェをしていただくということで紹介します。

この ILBH は多くの方に関心を持っていただいて、起業、創業しようという方もそうですしそこまではまだ具体的に考えてないけど勉強したいと、また市内の事業者の方で既存の事業だけのブラッシュアップや第2創業ということで新しいプログラムに挑戦をしたいというような方も含めて100名を超える方々に毎年参加していただいております。今回、卒業してどのような成果があったのかというところで、具体的にアクションを起こしていただいて「学びのマルシェ」ということで形にさせていただきました。

「学びのマルシェ」は、11月23日の10時からで、北コミュニティセンターISTAはばたきで開催します。主なプログラムとしては、子どもの学び、大人の学びそしてそれ以外のYouTubeやCanvaでのウェブデザインの体験教室、最近生駒市でも注目して取り組めるようなプログラムを形にして、ハンドメイドのワークショップなんかも含めていろんな学びを中心とした取組をしています。

ILBH 卒業生（浜口氏） プログラミング教室エヌキッズの浜口です。去年、創業7年目でしたが既存事業者も参加可能ということで、ILBHに参加しました。経営セミナー自体はすごく勉強になりましたが、それと同じぐらい同じ受講生からの学びというのが大きかったです。

自分の専門分野についてはずっと勉強し続けているので、その部分は深まっていますが、専門家であればあるほどその分野しか勉強できてきてない。それがILBHに参加したことでいろんな専門家の皆さんから学びを受けることができ、それが楽しくて刺激を受けたというのがこのマルシェを開催するきっかけです。創業セミナーというのは通常かなりの費用がかかりますが、市の主催で安心感があり、無料のセミナーで勉強させてもらった恩恵から、お世話になった生駒市の皆様にも同じ体験をしていただきたいという思いもあって、このマルシェを企画しました。

ILBH 卒業生（砂山氏） 今年5月に行政書士として自宅開業をしている砂山博美です。今回「学びのマルシェ」のイベントをしたいということを聞きまして、商工観光課の方に5人で訪問し相談しました。そこで、広報活動など親身に教えていただいて、ILBHのFacebookのコミュニティで出店者を呼びかけたところすぐに何人か手を挙げていただいて、同じ思いを持った卒業生たちが今回この「学びのマルシェ」をしようということで開催する運びになりました。

今回私達の思いや発表をお伝えさせていただける機会をいただけたことにとても感謝しております。

ILBH 卒業生（堀井氏） 現在会社員と副業で小売業のお手伝いということで、新しい働き方みたいなことにチャレンジしております。このILBH卒業生のイベントは、私たちの初の自発的なイベントで、生駒市の方でそういう形で種を蒔いていただいて、この芽を咲かし広げようと周知に頑張っていますが、できればもう少し何かで取り上げられていただければありがたいと思います。

また、この取組を通して、私たちのようなメンバーが増えて、生駒市がもっと活性化して、特に平日の日中の市内人口が増えればというふうに思っています。

【 質疑応答 】

記者 このイベントは、市内だけではなくて市外の方も広く呼びかけますか。

ILBH 卒業生 はい。インフォメーションでは、インスタやFacebook、市の広報紙で呼びかけているので、一応生駒市をメインとはしていますが、できれば、大阪の方からも生駒市ではこのようなイベントをしているということを知っていただける機会になればと思っています。

記者 令和5年度の130名の卒業生の中で今回のイベントにどれくらい参加されますか。

ILBH 卒業生 全体で20ブースありますが、飲食店4ブースを除く16ブースになります。

記者 イベントの発起人は何人ですか。

ILBH 卒業生 5 人です。

〔03_市内で「変革」と「挑戦」に取り組む企業を「IKOMASTAR」と認定し、支援します〕

市長 市内のものづくり企業に対して、「IKOMASTAR (イコマスター)」という認定マークを作ります。生駒市で頑張っておられるものづくりの企業の支援していくことが大切だと考えております。生駒市はエコノミックガーデニングという考え方から、市内の事業者、また市内の市民の皆様に新しく創業していただくということも大切だと思っていますので、この IKOMASTAR という取組は市内のものづくりの事業者が更なる発展を遂げるための伴走支援として、一緒に考えていただく専門家を派遣させていただきます。それによって、一緒に伴走して学ぶことで事業者自身がどのように事業展開、改善発展をしていくのかということを来年 3 月頃に予定している認定式でプレゼンテーションをしていただいて、認定マークをお渡しするという場も設けたいと思っています。また、それだけではなくてこのマークの認定を受けたものづくり企業で頑張っている企業をウェブ上や広報で周知する他、市が主催する合同の就職面接会や大都市での展示会の参加の機会を優先的に案内したり、また、この事業者同士の交流の機会を提供したり、市外のいろんなものづくり事業者との連携やものづくりを進めている全国的にも有名な方に来ていただいてお話を聞いたり、いろんな機会に応援していきます。

【 質疑応答 】

記者 ものづくり企業という定義はどのような業者をターゲットにしていますか。また、市内には何社ありますか。

担当課長 製造業、情報サービス業、建設業などで、人を雇われて作業をする状態であれば対象したいと思います。2~300 社程度が対象になります。

記者 公募方式ですか。

担当課長 はい、10 月 10 日に周知する意味でセミナーを開催しました。約 1,300 社にメールにて告知をしたところ、20 社から応募があり、各事業所の現場で改善策とか改良策を伝えました。

記者 専門家の派遣はいつからですか。また、どのような業種ですか。

担当課長 伴走支援を決定した 10 社に 11 月から派遣します。業種については、製造業が 7 社、自動車製造関連が 2 社、酒造業が 1 社です。

記者 派遣される専門家はどのような方ですか。

担当課長 デザイン経営という考え方をベースに現場改善の仕事を行うコンサルタントです。

記者 現場のブランド力の向上や、IT を導入しての事業効率化などもアドバイスをされるということですか。

担当課長 はいそうです。現場のニーズに合わせてと考えておりますが、事前にヒアリングさせていただくと、やはり一番困っているのは人手不足で、自社をどのように PR し採用するかということです。また、経営全般、採用、現場系にそれぞれの専門家が派遣されるというような形になっています。

記者 この 10 社のうち IKOMASTAR に認定されるのは何社ですか。認定される時期はいつですか。

担当課長 変革と挑戦に取り組む企業と定義していますので、今回応募していただいた企業で、伴走支援をした企業には認定させていただきます。来年に向けて伴走支援をしていきますので、認定されるの来年 3 月になります。

記者 この 10 社以外に認定することはありますか。

担当課長 今回はこの 10 社のみです。

記者 これらの事業者について市のホームページで掲載されますか。

担当課長 はい、市のホームページにも掲載しますし、伴奏支援の訪問記録などの要約を電子化して、企業全体共通のノウハウ集のサイトのページを作りたいと考えています。

記者 市がここまで各企業に突っ込んで伴走支援をする例は今までなかったと思いますが、この事業に対する思いを教えてください。

市長 生駒市が単なるベッドタウンを卒業して「住みやすい」「暮らしやすい」、そして「働きやすい」という 3 本柱を市制 50 周年のときに打ち出しました。企業に市外から来ていただいたり、創業起業の支援もしっかり取り組んでいきますが、生駒市で昔から頑張っていたりしている事業者の中で、さらに新しいことに挑戦をしていきたいという前向きな思いを応援していくことで、生駒市全体の産業の活性化や雇用の創出で働きやすいまち生駒市というものを、具体的な形にしていきたいと思っています。そのためには今回の事業はとても意味があると思います。

また、市内には約 3,000 社の事業者がありますが、今まで生駒市役所自体とのネットワーク繋がりはありませんでしたが、コロナ禍のときに「さきめしいこま」などの事業者支援を行う中で徐々に繋がりができてきておりますので、産業振興に繋がられるようなネットワークを具体的な事業にしていこうということで、企業に具体的な支援をしていくということです。

記者 IKOMASTAR に何を期待しますか。

市長 生駒市の輝ける星になっていただくと同時にこの光を見て、市外の皆さんが生駒市で創業し働きたいと引き寄せられるような素敵な光になっていただければと思います。

〔04_高山とさまざまな地域が交流する「ま〜ぜま〜ぜふえす」を初開催〕

市長 観光事業や歴史文化も含め生駒市に来てもらう取組として今力を入れているのは、生駒駅周辺から生駒山の夜景や生駒山上遊園地、近鉄生駒ケーブルなどですが、もう一つ生駒市の大きな場所として北部の高山地域があります。京都大阪奈良の三つの府県が境界線にあり、いろんな文化が交わる地域ですので、この地域を盛り上げていくために「ま〜ぜま〜ぜふえす」というイベントを開催します。

ここは、茶釜を始めとする様々な伝統工芸や文化などの歴史がありますが、それに加えてアートや地域の食材なども活かした風土、そしてくろんど池周辺でのスポーツとかアウトドア、リラクゼーションとアクティビティが融合するということ、また、大阪京都奈良生駒が合流するという意味もありますし、またここでいろんな分野で活躍されている人が、いろんな方と混ざっていくことで、生駒山周辺とはちょっと違う形で、新たな地域の活性化を目指したいと考えています。200 人でお茶を点てる日本記録に挑戦する取組も行います。

〔05_敦賀市と連携して多文化共生講演会を開催〕

市長 多文化共生講演会というものを定期的に実施していますが、今回は友好都市の敦賀と連携して開催します。

現在は海外の玄関口というと成田空港や関西国際空港ですが、戦前は敦賀港が日本で一番の主に船での海外との玄関口でした。

当時、ナチスドイツの迫害から逃れるために、日本のビザを求めて日本大使館にやってきた、多くのユダヤ人難民たちにビザを発行したのが、外交官の杉原千畝さんであるというのは、近年非常に注目を

集めていますが、そのビザをもらって日本に来たのが敦賀港です。

その当時の写真や背景のストーリーなどが敦賀市の「人道の港 敦賀ムゼウム」という資料館にあり、私も友好都市の締結時に訪問させていただきました。「ムゼウム」はポーランド語で資料館という意味です。

今回、その館長にお越しいただいて、この杉原千畝のおかげで敦賀港に来て命を繋いで、また、その命のバトン日本人とユダヤ人、また世界との繋がりになっているというストーリーがあります。そのようなお話を含めてさらに広げてお話をいただけると期待していますが、ちょうど地域共生社会の取組である地域共生サミットも先々週行ったところですが、敦賀市も第4回目のサミットの開催地でありましたし、地域共生という意味も含めて、友好都市との連携で開催します。

〔06_第10回ビブリオバトル全国大会 in いこまを開催〕

市長 私が市長になってすぐに始めましたビブリオバトルの全国大会の、記念すべき第10回目を来年3月に生駒市の図書館で開催します。10回目記念ということで、生駒市出身の森見登美彦さんにゲストとしてお越しいただきます。森見さんは大人気の作家ですが、お1人で講演をされることはあまりなく、出版社の方と一緒にトークイベントということで以前に一度お越しいただいたことがあるくらいです。今回改めてトークイベントにお越しをいただけるということで、前回も北海道を含め約300の方が来られましたが、非常に貴重な機会ですので、全国から沢山のファンが集まると予想しています。森見さんにはトークイベントの後にビブリオバトルの審査も参加していただきたいと思っています。

このビブリオバトルは、当初は全国大会と言いながら本州だけでしたが、今は北海道から九州まで全国的に広がっておりまして、市内のビブリオクラブとバトルクラブの皆様にも10回ともお力をいただいています。各地域の予選というのは全国の本屋やビブリオクラブの皆さんにも協力していただいております、非常に良い大会に発展してきています。

生駒市は、ビブリオバトルも含めて本や図書館を生かしたまちづくりということで注目していただいていますので、10回目の開催も盛り上げていきたいと思っています。

（その他の質問）

（山本昇副市長の退任について）

記者 副市長が長年にわたり市役所人生を歩んでこられた、その思いを聞かせてください。

副市長 市長が当選された3ヶ月後から9年4ヶ月間、副市長をさせていただきました。自分自身としては、一番最初の年の学研高第2工区の用地買収が一番大きな事業でございました。その後、主にハード系に関して、いろいろ取り組んで参りましたが、後半はほとんどコロナ対策に追われたという印象です。去年あたりからその学研第2工区も、具体的に動き出してきたということもあり、このあたりが交代の時というところで退任させていただきました。今まで本当にどうもありがとうございました。

市長 私は事務屋ですし、生駒に来てまだ14年目で、まだまだ新参者ですが、副市長はずっと地元で生まれ育ち、生駒市職員として長年奉職されて、職員の信望も厚く、技術的な専門知識や実績も豊富で私に足りないところを全部補っていただきました。副市長がおられたからこそ、市長として約10年間やってこれたと思っています。副市長がいなくなる喪失感は大変なものがありますが、また新副市長と共に副市長が残していただいたものは、職員、地域の方に根付いている部分もありますし、またデジタルの部分や地域共生社会などの他に、国や県との連携について、新副市長にも自分のカラーを出していただ

いて、新しいことにさらに挑戦をしていきたいと思います。特に副市長が心血を注いでいただいた学研第2工区はこれから50年100年以上続く生駒市の宝物になっていくものだと思いますので、副市長には今後も引き続きいろいろな形でご指導もいただきたいと思っています。

(了)